

# 大唐西域記と中央アジアの地名

高田時雄

大唐西域記は唐僧玄奘によるインド旅行記であるが、實地踏査に基づいて記録されたものであり、當時の地理知識を提供するうえで極めて貴重な書物である。中國では早く藏經に編入されたが、しかし宋代以降にはさほど讀まれた形跡はない。この書物の價値に氣付いたのはむしろ 19 世紀以降のヨーロッパ學者であり、特に中央アジアの地理に関してはイスラム化以前の情報を提供するものとして珍重された。20 世紀になって日本や中國でも俄然この書物に對する關心が高まったのは主としてヨーロッパの影響である。西域記の中央アジアに關する記録は、玄奘がインド往還の途次に見聞したもので、その第 1 卷及び第 12 卷に含まれるわずかな部分に過ぎないが、記録されるそれぞれの地名については、盛んな議論が行われてきた。

西域記を最初にヨーロッパ語に翻譯したのはロシアのワシーリエフだが、公刊されなかったために、普通にはジュリアンのフランス語譯が最初の翻譯と見なされている。その後、ビールの英譯が出現したことで、7 世紀はじめの地理知識が次第に學界に共通のものとなり、折しも各國の中央アジア探險隊が中央アジアで活動する際、不可缺の参考書ともなった。ロシアのプルジェヴァリスキーやイギリスのスタインらは、その旅囊に西域記を攜えていた。

しかしながらヨーロッパ學者が翻譯に用いた底本は、たいてい嘉興藏（乃至そこから派生したテキスト）であり、唐代に行われたテキストと相異なる點が少なくない。現在では一般に日本に傳わる古寫本テキストがもっともオリジナルに近いものと見なされており、日本古寫本を用いることで、これまでの中央アジア地名研究に多少の進展が期待できる。

今ひとつ忘れてはならないものに、乾隆以降に現在の新疆が清朝の版圖に入ったことで、新しい地理知識が中國にもたらされたことである。幾つかの重要な地理學著作が出現したが、興味深いのはチベット語譯「大唐西域記」の附注に新しい地理知識が反映していることである。これらの注釋が指示する地名には誤解も多く見られるが、全くの根據がないわけでもなく、一層の研究が待たれる。